

11 日新公

12 島津歳久（金吾）

13 島津義久（從四位下修理大夫・三位入道・法印竜伯公）

・ 410・420・421・428・429・430・431・433・434・442・444・460・461・468・472
14 島津義弘（兵庫守・維新公）
・ 367・369・378・379・380・382・383・385・386・387・389・406・418・444・469
15 種子島久時（左近）
16 新納忠元（武蔵守・入道拙斎）
370・379・381・382・400・401・407・411・412
379 367

17 浜田民部左衛門
370・379・381・382・400・401・407・411・412

18 本郷時久（前左衛門尉・入道一雲）
374・376 408

19 山田有栄（弥九郎）
400・408・414

【庄内陣記】の方が四人程多い。又、太守方の中心人物が、【庄内軍記】の忠恒（家久）から【庄内陣記】の義久へ移っていることもこの表からわかる。

二 鹿児島県立図書館蔵本『庄内軍記』の拾遺に

久国談話曰 庄内御在陣中二人々詩聯句モテアソハレシヲ鎌田雲
州眉ヲヒソメラレシ事 是ヨリ公家風濫觴スト云云

（注）川上久国も又【松操和歌集】の歌人である。

三
というのがある。【松操和歌集】は島津家久（忠恒）の立春の歌に始

まり、島津義弘の題しらずの歌で終わっているのであるが、この結構は、右の「公家風濫觴」の意識（和歌のことは特に記されていないが）と関りを持つていなかっただろうか。或いは、「中にも伊集院右衛門入道幸侃か謀叛結構のありさまこそ例しまれには聞へける」という庄内の乱で輝いた、守護方の団結、操（近世島津氏の原点）が憧憬されていなかっただろうか。

ホ
【庄内軍記】の「白石永仙鼻首の事」の条の冒頭部は、

祇園精舎の鐘の声諸行無常の響あり 沙羅叢樹の花の色盛ハ必
衰の理を顕す 奢る者久からず春の夜の夢の如し 猛き心も終
にハ亡ひぬ風の前の塵に同じ 逆徒の張本忠真ハ都城を降而…

となっている。【源平盛衰記】の「祇園精舎」の句を借用していることは言うまでもないが、伊集院幸侃、忠真一族も平清盛一門に準えてとらえられているようである。則ち、この系統の【庄内軍記】は【源平盛衰記】の影響を受けた本の一つなのである。

校異(異文)表を作成するうちに気付いたことを次に記して置きたい。

イ 鹿児島県立図書館蔵本『庄内軍記』は人名に於て『庄内陣記』に一致するものが多い(42箇所)。

ロ 『庄内軍記』には『松操和歌集』の歌人達の名前もみえる。次に、

その呼称と翻刻頒布本で出てくる頁数を記す。(人名の上の番号は『庄内陣記』との通し番号である)

1 伊集院久信 (肥前守・入道元栄)	53
2 伊勢貞昌 (兵部少輔)	35・36・120
3 入来院重時 (又六)	53・59・60・63・64・98・142・146
5 喜入久正 (大炊介)	67・68
6 喜入忠政 (撰津守)	55
8 島津貴久 (陸奥守)	20
9 島津忠恒 (又八郎・薩摩少将)	20・28・29・30・31・36・37・42・46・47・54・58・68・70・84
・ 96・97・98・114・121・122・137・140・141・142・143・146・148・154・157	
10 島津忠長 (図書頭・入道紹益)	53・55・61・97・112
11 島津忠良 (入道日新公)	114
13 島津義久 (従四位下修理大夫・三位入道・法印竜伯公)	19・20・41・46・47・68・69・79・80・96・123・140・141・142・143
14 島津義弘 (兵庫守)	20・22・23・28・34・46・47・146・156
15 種子島久時 (左近将監)	55

16 新納忠元(武蔵守・武州・刑部大輔・入道拙斉) 39・46・54・55・

59・60・114・128・129・130 (『新納拙斉詠歌の事』という一条がある)

17 北郷時久(左衛門尉・入道一雲)

25・26・31

18 山田有栄(弥九郎)

53

ハ 参考までに、『庄内陣記』に名前のみえる『松操和歌集』の歌人達を、

同様にあげよう。頁数は『島津史料集』による。

1 伊集院久春 (肥前守・入道元栄)	407
2 伊勢貞昌 (兵部少輔・弥九郎)	389・408
3 入来院重時 (又六郎)	400・411・416・429・430・445
4 大島忠泰 (久左衛門)	408
5 喜入久政 (大炊介)	401・408・420
6 喜入忠政 (撰津守)	407
? 久保元盛 (七兵衛尉)	386
7 島津家久 (中務大輔)	445
8 島津貴久	367
9 島津忠恒 (家久・又八郎・薩摩少将)	366・369・379・383・385・386・387・388
・ 389・395・406・407・413・418・420・421・432・435・442・443・445・468・469	
10 島津忠長 (図書頭・入道紹益)	368・379・381・400・407・413・419・443・449・450・469

156				155				154												
3	2	1	11	6	3		12	11	10	6 7	5	4		2	12	11	9	6	5	4
増宗幸侃	終に	打せたりけるか	さしもに	然るへくや	不思議なや	皆人	彼者共か	もてなして	侍の者に	獲物して	川田大膳亮	御自分 <small>ママ</small>	太守公の	奉供すへとの	思し召れん	御誅伐あるへきに	頼みしとかや	聊も	時にも	清正は
幸侃	終二ハ	打レタリケルカ	サシモ	然ルヘキヤ	不思議カナ	人皆	彼者カ	モテナシ	近侍ノ者ニ	獲ニシテ	川田大膳允	自カラ	太守ノ	供奉スヘキトノ	思召レシ	御誅伐アルヘキ	頼トカヤ	聊カ	時タニモ	清正ハ元ヨリ

158					157						
9	7	5	10		9	4	3	1	11 12	7	3 4
残らぬと ママ	成行とも当に ママ	我身	誅せられにけり	一族をも	一里の	幸侃入道か	一族を	東八郎兵衛尉	働きたりけれとも	参りしを	露頭したりしか其後
残ラネト	成行モ当寺ニ	我自	誅セラレケリ	一族ヲ	一里山ノ	幸侃カ	三族ヲ	東八郎兵衛	働キケリサレトモ	参リシ	露頭シタリケルカ其

	149	148 149	148	147					146			145								
7	1	12 1	7	9	8	5	4	12	10	5	3	1		8	1	11	9	8		
	証文候由承	一日片時も	十三代候歟	十二月	枯木も	旧規を	領地なるに	改替せられし	惟新殿	石田左衛門太夫	及はされ	軍務を	都城に下向	音添へて	科 ^{ママ} の風も	島津の御庄内に	徒らせ給ひ	補せらる	ましゝ	当社守護
	証文候申承 ^{ママ}	一日片時も	及十三代候	十一月	枯木	旧規ニ	領地タルニ	改替セラレシニ	惟新	石川左衛門太夫	及ハレ	軍務ノ労ヲ	都城へ御下向	音添フテ	科戸ノ風モ	島津ノ庄ノ内ニ	徒ラセ給フ	補セラレ	マシマス	当家守護
御書の宛名																				
	153	152	151 152									151				150				
	3	10	12 1	12	10		8 9		7	5		4	3	1		9	8	10	8	
	却て逆意を	誅伏の事	夢にも分す ^{ママ}	悔とも	一住ならは ^{ママ}	ぬ	分散してあるにもあら	踵を断しに ^{ママ}	長者も	栖居	ひなる	其まゝに差置れなは基	聞届け	忠真か弟并に母	徒させ	妻をは	居をしめ	宛行はる	此内各	
	却ツテ低シトイヘト	伏誅事	夢トモ分カヌ	悔レト	一所ニ住ナラハ		分散シテアラン ^{ママ}	踵ヲ継シニ	長者	棲	ニナル	其マ、ニテ閣ナハ基	聞シ召シ届	忠真カ母	渉ラセ	妻女ヲハ	居ラシメ	行ハル	各々	
	ク再ヒ逆意ヲ	モ奸謀ノ思ヒ止事ナ																		

140				139										138					
7	5			12	11	10	7		6	7	6	5	3 1 4	3		2		1	
内府様	前書			属せしめんや	且	降参すへきの	和融の	頃より	内府公	彼の僧し	群り寄る	三衣の釧	安からぬ	小兵衛	彼兵衛か伯父	権少僧都	初	石見守	
内府公	前書之事	シメンヤ	間彼ノ地ヲ安堵ナサ	越後国川中島ヲ忠真	属セシメンヤ或ハ又	且ハ	降参スヘキ	和睦ノ	頃ヨリモ	内府様	彼僧少シ	群り寄スル	三衣ノ紐	安カラン	小兵衛尉	彼小兵衛ハ伯父	権僧都	初テ	
8行にも																			
144				143				142				141							
7	5	2	1	10	8	2	10	7	3	12	10	9	8		7	2		11	9
夜すから	いふせき。	輔佐し	讃岐守忠相	語り伝ふ	鎮座	旧功を	六歳にて	熱懷	三原諸右衛門	吉井	両城	替て	皆城を	色めきこと	得たるか	愛宕大権現	四天王	奉始	譏訴
夜モスカラ	イフセサ	輔シ	讃岐守忠能	語り伝ル	領座	旧功モ	六歳	蟄懷	三原諸右工門尉	吉利	両城降ル	入代テ	此城ヲ	色メキアフ事	得カ	愛宕	四天王	秦始	譏許

135				134				133				132								
3	1		12	11	10	7	5	4 5	2	9	7	6	1	9	8		7 8	3	11	6
頼みに	待らん	かくても	恥かななど	紛るゝへきも	事なれは	着せひとしく	大将として	伊集院新左衛門	かくては	思もなし	納れんとする	成りける	尽果ければ	是を聞	暫くの	れは	流すに城下を廻る川な	追ならんと	風情にして	一々
頼ミ	待ン	トテモカクテモ	恥カナト	紛ル、ヘクモ	事ナレトモ	着トヒトシク	大将トシ	伊集院新右衛門	カクテモ	思ヒナシ	欲納	成リニケル	尽キ果ケレトモ	是ヲ聞テ	暫シノ		流スニ	追ナント	風情シテ	一々ト
136 頁 3 行 にも																				
137										136										
	6 7	5	1 2		11		9	4		2 3	2	1	12	10	8	7	6 7	6	5	
許幾寄来て田原の	山之口の城中より敵軍	田原に備て居たりしに	立られ	枯檣	あらん	女童の命を続んは如何	し	掛らるゝは又い。甲斐な	志和池の	し	末そと知られて浅まし	兎に角に遁れ得ぬ	者共と名のり	勘解由久宜	只一揉に	御陣とも	味方にも	逃ける	此度も亦	敷根仲兵エ
	田原ノ	立ラレシカハ	枯檣	ン	女童命続ハ如何ナラ	ナク	掛ラル、カ又ハ甲斐	志和城地ノ城ノ	シ	末ソラニ知レテ浅マ	只ト二角ニ遁レ得ス	者トモ	勘解由久宜	只捫ニ	御陣ノ勢共	味方ニ	逃入ケル	此度モ	敷根仲兵衛尉	

126				125				124				123				122				
4	1	12	10	5	4	12	9	5		2 3	1 2	9	7	6	4	1	11	9	5	4
原田市之允	鷲巢九郎	溝田孫八	土吐川西内	厚地丹後半田原	福木。奎兵衛	秋丸仁助	山下弥右衛門	久留善左衛門	門	本田弥四郎菱刈半左衛	太守の	御沙汰も	逃れ得し。	山伝ひして	かけ抜け	義久	働	居たりしに	一図に	何ん為にか
原市之允	鷲瀬九郎	溝田孫介	土吐川西市	厚地丹波田原	福元奎兵衛	秋山甚助	山下孫右衛門	久留善兵衛	工門	本田孫四郎菱刈半右	太守公ノ	御沙汰	逃レエス	山伝シ	掛拔テ	義久公	働モ	居タリケルニ	一同ニ	何之為ニカ
131				130				129				128				127				
3	1	10	9	8	6 7	6	2	11	10	4	3	1		12	9 10	9	8	5	3	12
大事なれば	いとふく	愚なるかな	事やらん	詞もなくいとふく哉	たちもしらぬ	暮れならぬ	文字たに	打向ひ	中よりも	誰か	留らむ	久しとは	落されしは	鉄砲に	打見へて	少年	毛孔を	書たしは	残んの	枚拳に
大事ナレト	ハトフク	愚哉	事アラン	詞ナクテハトフク哉	タツキモシラス	暮エナラス	文字タニモ	向ヒ	中ヨリ	誰カハ	留ラス	久シト	墜サレシハ	鉄丸ニ	打見エ	少人	人ノ毛孔ヲ	書タリシハ	残リシ	カソヘ拳ルニ
前出																128 頁2行にも				前出

118				117				116				115								
11	10	7	5	4	10	7	6	4	2	9	4	1	12 1	10	6	3		2	12	4
おひき出さん	開て打出	陣中に	伏見	城郭より	成りにけり	助ける	郎徒	善左衛門尉	そくはくの敵を打ち	掛け散らせよ	命の	烹て	首陽の思	通ふへきにも	絶んかため	排せらる	鎌田尾張	久明	思ひし事は	武州入道
偽引出サン	開ヒテ打テ出	陣中ヲ	伏兵	城ノ外郭ヨリ	成ケリ	助ケケル	郎等	喜右衛門尉	ソコハクノ敵ヲ打テ	掛散セ	露ノ身ノ命	烹(烹)	首陽ノ患	通ルヘキニモ	絶ンタメ	排セラレ	鎌田尾張守	久朗	思ヒシコトモ	武蔵入道
				鹿は陣に同じ								鹿は陣に同じ								
121				120				119												
11	9		6	2 3		2	1		10	9	8		3	11	8	6 7	6	4	1 2	1
中霧島の	洪雲の ^{ハマ}	所を	先を争て	候らはん	手たて	をきよせ	不審し	軍勢を先にと ^{ハマ}	つゝけ	片々として半天に	中山助太	桜馬場の	敵の勢は	号令をも	引返す	五百騎	吹くや	飽まで敵を	揚るこそ繁し ^{ハマ}	軽々と
中霧島ヘノ	湿雲ノ	所ニ	先ヲ争ヒ	候ラン	手術	偽引ヨセ	不審也	軍勢我先ニト	ツ、ケヤ	仵々トシテ半天ヲ	中山平太	桜馬ノ	敵ノ勢トモ	号令ヲ	引退ク	五百余騎	吹ヤ否ヤ	敵ヲ飽マテ	揚ルコト繁シ	軽ク

[illegible]

96		97		98		99	
2	4	5	7	12	9	2	3 1 4
便りとして	次第を	行状	達してけり	首数捕證文	可抽軍節	北郷長千代	去りぬる
得拝領	誠惶恐謹言	作左衛門尉	拒みける	設くる	陣を	構へたるは	僅。
打放つに	山田因幡守	徘徊して	かゝけたれば	怪しめ			
便りト	次第共	有様	達シケリ	首数討取注文	可抽軍節	北郷長千代丸	去ル
致拝領	誠惶恐謹言	作左衛門	拒メケル	設タル	陣々ヲ	構ヘタレハ	僅カニ
相放ツ	山内因幡守	徘徊シ	桃タレハ	怪シミ			
鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ	97頁1行にも	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ
100		101		102			
8	9	11	1	2	6	7	3
交りたれば	如何そや	足を出して	逢て	以てひらいて	一時の興	帰らんまで	最前服痛の者いかに堪
交リタルハ	如何ソ	一足ヲ出シテ	逢レテ	持タル太刀ニテ	一座ノ興	帰ル迄	最前ノ腹痛ノ者ハイ
一人ハ痛手ヲ	待設ケ首尾ハ	カニ堪スアルラン	一人ハ痛手ヲ	待設ケ首尾	一人痛手を	かゝりて帰り来り	これを聞て
此ヲ	崇ニコソ	起リケル	笑ハン者モナシ	虚鉄砲	堅メヲナシ、カ	当ルト	当リケルニテソ
眼下ニ	都は陣に同じ	102頁2行にも	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ	鹿は陣に同じ

92					91					90					89					
4	2	12	8	7	5	4	3 4	1		8	6	4	11	9	3	2	12	11	2	
追入れし印	家張正綱の	正綱と	古垣与兵衛	打れしをも	死體	文録。	埋て	死體に死體を	鳴止む	戦ふも	名字を	切手をならへ	軍兵とも	敗亡して	北郷作左衛門	長寿院淳清	城よりも	走り違ふ	大ひに騒き乱れて	きせいすゝんて
追入ヘシ 印	家張正綱ニ	正綱	古垣与兵衛尉	打レシモ	死骸	久縁	埋ム	死骸ヲ	鳴ヲ止ム	戦フ者モ	或ハ名字ヲ	切先ヲ双へ	軍兵モ	敗北シテ	北郷作左衛門尉	長寿院淳淳	城中ヨリモ	走セ違フ	騒キ乱レテ	競ヒ進ンテ
前出																				
95					94					93										
12	11 12	7		11	8 9	2	1	12	11	9	8	7	4	3	1	11	10	9	6	5
意ならずも	扶持せる	雲井出す	彼童を	湯。穢を	不思議なるかは	打るゝ者	取たりしかは	壘陣に	友重	世間に其間に。	先登して	七兵衛尉	間に挾て	着替て	下二の城戸	甲を	自分此を	出しければ	争てか	きくにや
意ナラス	扶持セン	雲井ナス	彼童子ヲ	触穢ヲ	不思議ナル哉	計ル、者	取タリシハ	堅陣ニ	大重	世間ニ	先登シ	藤七兵衛尉	間ニサシハサンテ	差替テ	下ノ城戸	甲ヲハ	自ラ此ヲソ	出シタリケレハ	争テ	サフニヤ
鹿は陣に同じ																				

『庄内軍記』

都城市立図書館蔵本
鹿兒島県立図書館蔵本
校異（異文）表（下）

橋口晋作

86	85	84	頁
3	10	3	行
1 2	3	4	都城市立図書館本
9	1	9	攻らるへしとて 御進発まします
6	3	野々美谷と安永の間を 過ぎて	御進発マシマシ
3 4	承て	野之三谷ト安永ノ間 ヲ過キ	攻ラルヘシト
山田作右衛門尉	向ひ	立させ給ふ	鹿兒島県立図書館本
宮丸村まで	給リテ	立させ玉フ	注
打出しかは	山内作右衛門尉	打向ヒ	都は陣に同じ
新手の勢に味方は小勢	宮九村マテ	給リテ	
なりしかは	打テ出シカハ	山内作右衛門尉	
山田作左衛門尉	要手ノ勢味方ノ小勢	ナシカハ	
	前出		

88	87
1	5
12	6
8	2
	1
6	10
	9
	6
	5
しつはらいして	二人に一人
重信源五兵衛尉	契約したりしかは
へきへき	鉄砲に
	平山勝左衛門尉
折んより	曾我介左衛門尉
きの	引退く
	はつたと睨んで汝か如
	ノ
折ランヨリ速ニ首ヲ	ハタト睨ンテ汝如キ
ノヘテ我等カ刀ヲ試	引退キ
ミヨト眼ライラ、ケ	平川勝左衛門尉
僻易	曾我助左衛門尉
重信源兵衛尉	
殿戦シテ	